平成１６年度採択分
平成２１年３月３１日現在

チベット文化圏における言語基層の解明

Linguistic Substratum in Tibet

長野　泰彦（Nagano Yasuhiko）
国立民族学博物館・民族文化研究部・教授

研究の概要
チベット・ビルマ語族は、中国・青海省からパキスタン東北部にわたる広い地域に分布する。この語族の歴史はその大枠がようやく明らかになってきたものの、未解読文献言語や記述のない言語が多数残っている。本計画は①未記述言語の調査、②未解読古文献(シャンシュン語)の解読、③チベット語圏の言語基層動態解明、を目標として研究を行い、幾つかの知られていなかった言語を発見して記述、新シャンシュン語(14 世紀)語彙集集成、古シャンシュン語の文法的特徴の抽出、に成功しただけでなく、歴史言語学方法論に接触・基層という視点を導入することの意義に関して提言を行うことができた。

研　究　分　野：チベット・ビルマ歴史言語学

科研費の分科・細目：人文学Ａ　言語学

キ　ー　ワ　ー　ド：ギャロン、チベット・ビルマ諸語、シャンシュン語、言語基層

１．研究開始当初の背景

チベット・ビルマ語族は、中国・青海省、四川省、雲南省、チベット自治区、ヒマラヤ地域、インド東北部と西北部、パキスタン東北部にわたる広い地域に分布する大言語グループであり、それら諸言語の共時的・通時的研究はこの 80 年間に長足の進歩を遂げた。しかし、それは主要な言語の分析に基づいた系統関係の大枠が示された段階であり、未だ解読されていない文献言語や記述のなされていない言語が多数残っている。この語族の中で最も古い文献資料を有するチベット語・チベット文化圏ひとつを取ってみても、そこは決してチベット語によって覆われていたのではなく、多様な基層言語が後にチベット文語の基礎となる自然言語と接触するプロセスを経たはずである。

２．研究の目的

本研究はこの言語動態を河西九曲の地（四川省西北部）・チベット西部・及びヒマラヤ地域での未記述言語のフィールドワークによって的確に把握し、チベット言語圏における言語基層のあり方を解明するとともに、その脈絡において未解読言語のひとつであるシャンシュン語の再構成を行う。このため、下記の 4 項を重点的に研究する。

①チベット・ビルマ系未記述言語の調査研究とデータベース作成
チベット文語の基礎となる自然言語(pre-Tibetan)に基層言語として接触したと考えられる、川西走廊の地（四川省西北部）、チベット西部、及びヒマラヤ地域の言語、特に、木雅語、嘉絨語、羌語、ガルワールヒマール諸語、の形態統辞論を中心とした記述研究を行う。

②Pre-Tibetan の再構成とチベット語文語成立過程の研究
基層言語と文語チベット語との比較を通じて、基層言語が文語文法に及ぼした影響を探り、自然言語としての Pre-Tibetan の語彙形式と文法を再構する。同時にチベット語文語がいかにして人工的に整備されたのかを跡付ける。

③シャンシュン語文献の解読と文法の再構成
チベットに仏教が齎される以前にドミナントであったポン教徒の言語、シャンシュン語を、文献研究と統計数理学の立場から総合的に解析し、解読を目指す。

④上記の具体的な言語現象を基礎として、歴史言語学の方法としての「比較」に「基層・接触」の視点を導入することがどの程度有効であるのかという方法論的観点からの検討を行う。

３．研究の方法

①チベット・ビルマ系未記述諸語の調査研究は、主として中国四川省西部とインド北部(ガルワールヒマール地方)で現地調査を継続的に行う。

②チベット語文語形成過程については、木簡文書の分析を継続的に行い、Pre-Tibetan の統辞法再構成を目指す。
③シャンシュン語文献の解読はふたつのアプローチを平行させる。ひとつは敦煌出土チベット文献に含まれる非チベット語文献を特定し、そのうちの 6 種が同一の言語を表記したものと判断。それが古シャンシュン語であるか否かを検討する。それらについて統計数理的手法を援用しつつ分析し、文法的特徴の抽出を試みる。
シャンシュン語のもう一つの層である新シャンシュン語(14 世紀以降)については、現存するポン教文献 16 種からシャンシュン語に来源を持つと考えられる語彙を抜き出し、ポン教学僧との共同研究を経て、チベット語語釈と英訳を付した辞書を作成する。
④歴史言語学の方法としての「比較」に「基層・接触」の視点を導入することがどの程度有効であるのかという方法論的観点からの検討を国際シンポジウムにより検討する。

４．研究の主な成果

①チベット・ビルマ系未記述言語の調査については、主として中国四川省西部とインド北部(ガルワールヒマール地方)で現地調査を継続的に行い、目標としていた程度の精密度で記述を完了しただけでなく、幾つかの従前知られていなかった言語を発見することができた。
②シャンシュン語文献の解読と文法の再構成については、ふたつのアプローチを平行させた。ひとつは敦煌出土チベット文献に含まれる非チベット語文献 6 種について統計数理的手法を援用しつつ分析した結果、数点の文法的特徴を抽出した。
シャンシュン語のもう一つの層である新シャンシュン語(14 世紀以降)については、現存するポン教文献 16 種からシャンシュン語に来源を持つと考えられる語彙を抜き出し、ポン教学僧との共同研究を経て、チベット語語釈と英訳を付した辞書を作成し、公刊した。
③シャンシュン語の歴史的位置づけと、歴史言語学の方法としての「比較」に「基層・接触」の視点を導入することがどの程度有効であるのかという方法論的観点からの検討は 2008 年 9 月に国際研究集会 Linguistic Substrata in Tibeto-Burman Area を開催し、議論を行った。この結果、今後この研究の進むべき道筋や“Drift”概念の導入のあり方などにつき、具体的な方策と展望が示された。

５．得られた成果の世界・日本における位置づけとインパクト

① チベット・ビルマ系未記述言語の調査の成果として、ガルワールヒマール地方の言語記述を格段に精密化したこと、四川省西部で幾つかの従前知られていなかった言語を発見することができた。チベット・ビルマ語研究にとって、大きなインパクトである。
② Pre-Tibetan の基層を保つと言われるギャロン語ツェンラ方言の包括的な辞書を刊行できた。
③ シャンシュン語文献の解読は,サンプル数の少なさにより難渋を極めたが、いくつかの文法的特徴を突き止めた。
④ ポン教文献 16 種からシャンシュン語に来源を持つと考えられる語彙を抜き出し、チベット語語釈と英訳を付した辞書を公刊したが、これは世界初の業績で、広く引用されている。
⑤ 歴史言語学の方法論的観点からの検討を国際シンポジウムにより検討し、パネリスト以外に、国内外から多数の参加者があった。

６．主な発表論文

（研究代表者は太字、研究分担者は二重下線、連携研究者は一重下線）

本研究計画に参加した者の個別論文は多数あり、それらについては JSPS の HP「研究成果報告書 C-19」を参照されたい。
　書籍として公刊した,まとまった成果として下記の 5 点がある。代表者、分担者、協力者の全員がいずれかの刊行物に執筆している。

① **Y. Nagano** & S. Karmay (eds): *A Lexicon of Zhangzhung and Bonpo Terms.* SER76 国立民族学博物館　2009
② M. Prins & **Y. Nagano** (eds): *A Lexicon of the rGyalrong bTsanlha Dialect.* SER79 国立民族学博物館　2009
③ **Y. Nagano** (ed): *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics.* SES75 国立民族学博物館　2009 (研究成果報告書 Vol.1)
④ **長野　泰彦（編）**『チベット文化圏における言語基層の解明』Vol.2 (研究成果報告書 Vol.2)
⑥ **長野　泰彦（編）**『チベット文化圏における言語基層の解明 Vol.3　(研究成果報告書 Vol.3)

ホームページ等
http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/16102001.html